

---

# **機動戦士ガンダムSEED ANOTHER WORLD**

トランザムフリーダム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED ANOTHER WORLD

### 【EZコード】

N2468X

### 【作者名】

トランザムフリーダム

### 【あらすじ】

ありえたかもしれないもう一つの可能性。キラがナチュラルに、カガリがコーディネーターに…。これは原作のSEEDと違う世界の物語。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。駄文ですがよろしくお願いします。

プロローグ

「ちゅうと父のところに戻らなければならなくなつた」

「そういえばお前の父さんフラントの偉い人だつたな。せつぱり戦争になりそうかな……」

「……じゃあしばらくの間会えないな。」

「ムニン共役リ」のなべ三一通

「そりゃうどこが子供っぽい」

— てめえ！」

ל' ינואר 1900 ערך ב' ינואר 1900

「それよりこれ

アーヴィングは、この工事を取扱つた。

「エリザベス」

「前に君が作ってくれて頼まれたものだよ。名前はアリヤ。君にあげるよ。大事してくれ。」「あ…ありがとう」

と少女は頬を染めた

「ああ。アラノ。」

「業もござ  
カガリ。一ヒ三人はキスを交わしました。

だが二人はまだ知らなかたつた。そう遠くない未来に戦場でぶつかることは……。

## 第一話（前書き）

続きを読みます。

## 第1話

「アスラン side」

「…ラン！アスラン！」

「ん？」

「大丈夫ですか？ぼくとしてましたけど。」

「すまないニコル。考え方してたんでね。」

「ふん！どうせびびつたんだよ。」

「何を根拠に言ってるんだ？証拠は？」とわざと「うなづいたく」言ってやつた。

「なんだと！」

「イザークビーブリッヂ。」「俺は馬か！？」

と漫才（？）をしてるのは同期のイザーカー・ジユールとティアツカ・エルスマンだ。二人の漫才を苦笑しながら見てるのはニコル・アマルフィだ。「まあまあ、ざわざわしたいのは分かるが少しで作戦決行だ。気を引き締めよう。」と先輩のミゲル・アイマンが漫才を止めた。

「この作戦は超重要だからな。失敗すれば…。」「分かつてますよ。野蛮なナチュラルどもがMS<sup>モビルスーツ</sup>を使うようにならからな。コードイネーターの専売特許だつてのに。」

「戦争を長引かせたくないですね。」

とティアツカとニコルがミゲルに同意した。

「ああ…。ザフトのために。」

ザフトのために…か。あいつは元氣にしてるだろ？

「カガリ side」

「ザフトの進行は激しく、カオシュンが落ちるのは時間の問題でしょ。」とPCのニュースが報道された。

「大丈夫かしら？結構近いけど…。」

「大丈夫だろ？うちには中立だし。」

とミリアリア・ハウヒトール・ケーニヒが談笑してた。二人はカッフルらしい。

「カガリ。バランサーを調整してくれ。」と話したのはサイ・アーガイル。さつきの二人とあわせてカトウゼミの生徒だ。「ああ…ちよつと待つて。」ここでは工学の勉強をしている。

「ありがとう。助かつたよ。それにしてもまた戦争のニュースかいいニュース聞かないな。」

「例えば？」

「うーん…人気歌手が結婚宣言したとか？」

「このご時世に呑気に歌ってる人はいないと思うけど。カガリはどう？」私はそういう世間のことは疎いからな。パソコンに夢中で。

「

「カガリらしいや。」

なんか妙に馬鹿にされた気がするがスルーしよう。最近ことある」と怒鳴るからな。と考えていると、ドアが開いた。いたのは

「あの…カトウ教授はいますか？」

氣の弱そうな少年だつた。「カトウ教授になにか用かな？」とりあえず事情を聞いてみた。

「はい…聞きたいことが…」ドーン…！

「…?…?」

突然コロニーが揺れた。なんだ…？

「大変だ！ザフトの襲撃を受けてる」

は？なぜ中立なのに？ザフトは何を考えてるんだ？

「やっぱりあれのせいか…。」と少年がいきなり奥の方へ走つてしまつた。

「おい！みんな先に逃げろ！」

「カガリは！？」

「さっきの奴助ける！」「気をつけろよ！」

みんなが逃げたのを見届けた後、私はさつきの少年を追いかけた。

第1話（後書き）

# 離壇芸人ばりのツツコニ。

## 第2話（前書き）

戦闘描写が下手ですが温かい田で読んでください。

わつといふひじり瓦礫やらなんやらが散乱している。なんで中立の  
ゴロニーを襲つたんだ…！それよりさつきの男の子はどこだ？とし  
ばらく走つているとさつきの男の子がいた。怪我をしているのか片  
足を引きずつている。

「おい！」

「あなたはさつきの…。なんですか？」

「なんですかじゅねえよ馬鹿！今の状況分かつてるのか！？」と怒  
鳴ると「す…すいません。」と少年は怯えながら応えた。

「でも確かめたいことがあって…。グ…！」

「でも足を…！…仕方ない肩貸してやるからその『確かめたいこと』  
とやらがあるところと一緒に行つてやる。それで満足か？」

「すいません…。」と少年は応え手を私の肩にのせた。

「…たくさんで首突つ込むんだろう私…。」

「？何か言いましたか？」

「なんでもない行くぞ。」と私達は奥へ進んだ。

しばらくすると工場のよつな場所に着いた。よく見てみるとMSの  
ようなものがあった。ガフトで量産されている『ジン』の単眼では  
なく、人間のように一つ目だった。

「やつぱり…！なんで父さんはこんなことを……！」と大声で叫  
んだので下にいた作業員らしき女性に撃たれそうになつた。

「バカヤロー！こつちは民間人だぞ！」

「民間人…？なぜここに？いやそんなことよりこれだけでも…。  
とMSのところに行つてしまつた。

「なんだよたく…！それよりも逃げないと…」

「逃げると言つてもどこに…？」と少年は泣きそだつた。

「いづちにシェルターがあつたはず！走るけど大丈夫か？」

「はい…なんとか。」

シェルターに行くと近くのインター ホンに話しかけた。

「おい！ シェルターに入れるか？」

インター ホンから男性が『もうギリギリだ！ あと一人つてとこだ！』と応えた。

くそ…！ ジャあ…！

「連れが怪我をしています！ こいつだけでも入れろ…！」

「…わかった。開けよう。」とエレベーターが来た。

「お前だけでも逃げる…！」

「え…？ あなたは？」

「別のところから逃げるよ。ほら早く行け！」と無理矢理押しこんだ。エレベーターが行くのを見送ったものの…

「…どこから逃げるか…？」と途方にくれているとさつきの作業員がザフト兵の一人を撃ち倒した。が、そのあともう一人のザフト兵が作業員に撃つてきた。

「グ…！」作業員は肩を撃たれたのか肩を押さえながら物陰に隠れた。

「助けないと…！」と本能的に走つて手すりから飛びおりた。これくらいの高さは平気だ。「大丈夫か！」

「さっきの…！ グ…！」と作業員は呻いた。撃つてきたザフト兵がナイフを取り出しながらこっちに走つて來た。私はそれを迎えうつために攻撃態勢にはいった。するとザフト兵が急に立ち止まる

「カガリ…？」と声をあげた。

…！ その声は…！

（アスラン side ）

チッ！ ラステイが撃たれた！ あれじゃ あ即死だろう。このナチュラルが！ 拳銃を撃つが連合兵の肩に当たつて弾が切れた。じゃあナイフで…！ 相手に向かつて走ると誰かが相手の側にかけより迎えうつつもりかこちらを睨んだ。だがその目には見覚えがあつた。自分が

一番大切な…

「力ガリ…？」なぜこんなとこに…？と混乱していると連合兵が拳銃を構えた。

「チッ…！」これは撤退だ。このMSはほかに任せよう。しかしぬぜ彼女がここに？

「ラステイは失敗だ！MSが一機確保された！」とミゲルに通信をいれた。『…わかった。アスランは近くのMS確保して撤退しろ！あいつは俺がやる！』と応えた。あいつはミゲルに任せるとして…。俺はMSを確保した。OSを立ち上げコーディネーター用に調整した。

「ミゲル…。気をつけてくれよ…。」と俺は先に撤退した。

↙カガリside ↘

なぜあいつがザフト兵に？と考えていると作業員が

「あなた！こっちに！」と手をひかれMSのところまで来た。

「乗るわよ！」

「え…？でも」

「逃げるにはこれしかないわ！早く！」と急かされたのでMSに乗つた。

「これだけでも…！」と電源をいれた。するとOSが立ち上がった。なんか色々英単語がでたが、その頭文字をつなげると

「G・U・N・D・A・M…。ガンダム？」と読めた。そういうじているうちに止め具を無理矢理外しながらガンダムが立ち上がった。といきなり、

「右！敵のジン！」

「…！」

ジンが襲いかかってきた。このままじゃやられる！と考えると一緒に乗った作業員がスイッチを押した。すると敵の攻撃が当たったのかガンダムが揺れたが傷ひとつついてなかつた。でも…このままじややられる！

「おい！ もうちょっとうまく動かせよ！」

「仕方ないじゃない！ まだ〇△が未入力なのよー。」「じゃあどけー。」

「は？」

「…私が動かす！」とキーボードを出し、入力した。作業員が驚いたような表情をしたがそれもそうか。ナチュラルじゃできない諸行だからな。そして入力が完了した。よし！ これで…。「ハー！」相手に蹴りをいた。突然のことでの対処できなかつたのかまともにはいつた。だがまだ立ち上がつた。

「IJのヤロウ！」

相手にパンチやキックを叩きこんだ。とIJnDIJnKくこんではいるがまだ動けそうだ。

「あなたもうちょっと丁寧に扱いなさい！ 武器があるでしょー！」

「それを先に言え！ って頭部バルカンとナイフしかないじゃないか！？」「まだ整備中だったの！ 文句言わないで早く！」「わかつたよ…！」

腰からナイフを一本取り出した。相手が剣で切りつけてきたが、片方で受け流しもう片方で相手の頭部に突き刺した。相手のジンは動かなくなつた。

「ふう…。」やっと終わつた。が…

「早く離れなさい！」と作業員が叫んだ。するといきなりジンが自爆した。

「ウワ―――！」と吹き飛ばされた。

「いっつ…。」頭を打つたが私は平氣だつたが作業員が氣絶していった。

「どうしよう…？」と考えているとゼミのみんなが駆け寄ってきた。よかつた無事だつた！ さてと降りて合流するか。この作業員も降ろそう。なんで中立の「ロニー」にMSがあるのか知つてそつだし。

## 第2話（後書き）

ラステイ「結局セリフねえ…。」「

ラクス「まあ仕方ないですわ。」

ラステイ「いきなり出てこないでくださいよ…」というよりまだあなた出でませんよ！」

ラクス「わたくしは原作の方ですから関係ありませんわ。」

ラステイ「え…？」

ラクス「これから後書きには主人公四人が仕りますので読者の皆様よろしくお願ひしますわ。」キラ・アスラン・カガリ「よろしくお願ひします。」

ラクス「あとラステイさんはもう出でませんので。」

ラステイ「ウワーン……！」

ミリアリア「カガリ！大丈夫？」

カガリ「ああ…まあな。みんなも無事か？」

サイ「ああ怪我ひとつしてないよ。」

トール「まあ、シェルターがもうないから脱出できなかつたけどな。

」  
はは、と笑いながらいつた。

トール「それよりも凄いな！MSの戦い！あれお前が操縦したのか  
？」

カガリ「ああ…まあな。でも興奮する気持ちも分かるが、なんで中立の「ロード」にこんなのがあるのか気にならないか？」サイ「そういえば…。」カガリ「完全な条約違反だ。…まあ一人関係者らしい奴がいるからそいつに聞くよ。名札みたら連合兵らしい。」ビベンチに横たわる女性を指さした。

ミリアリア「そう…。氣をつけてね。連合軍だからあなたのこと…」  
カガリ「分かつてゐるよ。お前らはそのMSの近くにい」「…ドキューン！」

カガリ「！」

連合兵「あなたたち！それから離れなさい！」  
さつきまで氣絶していた連合兵が目の覚ましいきなり威嚇射撃をした。

ミリアリア「キャア！」サイ「なんだ！」

トール「何するんだいきなり、驚くじゃないか！」

連合兵「それは我が軍の機密事項なの！無闇に触らないでちょうどいい！」と声をあらげていった。カガリ「我が軍？…やっぱり連合軍のものか？」トール「何だよ！連合がなんで中立の「ロード」でMS造つてゐるんだよ？」

サイ「完全な条約違反だぞ！」

連合兵「黙りなさい！何もわからないのに！これが現実なの！外ではじつは戦闘行為は当たり前なの！現実から目をそらして…！」連合兵はあまりの怒りからか子供あいてに熱弁をふるつた。

連合兵「！？」

連合兵

「リアリアー セヨーとー！ガガリ！相手に銃を持ってるのよ！怒らせるようなことは…」

力ガリ「大丈夫だ。」

「わー！」  
ガカリ！ ガヌチだ！ …お前の言いたいことはわかるが和達は戦争  
が怖くて中立のコロニーに住んでいる。それをブチ壊したのはお前  
ら連合だ。「連合兵」「でもあなたたちの年齢で戦っている子もいる

ガガリ一軍がそんなんていしのか?...「マリニー・ラミアスさん  
マリユ一「あなたなぜわたしの...?...名札を見たのね。」

アカアカ十枚万一千五百円。名前有り方の本

ガカリ、ああ、それよりもとにかくくれるんだ? 働りとはいえ平和だった生活が送れなくなつた。責任はとつてくれるんだろうな?」マリュー、「うつむいたまま何も答えなかつた。拳を握りしめた

マリコー「『めんなさ』…ちょっと焦っていたのよ。」カガリ「お前の本心じゃないのか？」

マリュー「ええ…それに触れられていたから慌てちゃつて…。」と頭をかかえながら答えた。

サイ「ふう」。

ミリアリアー「時期はどうなるかと思つたわ。」みんなも安堵した。  
ような顔をした。

マココー「うめんなセ...巻き戻しまつて。」  
カガリ「？お前が責任者じゃないのか？」

かガリー？お前が責任者じゃないのか？」

マリュー「ええ…私は上層部から命令されただけよ。確かに不信感はあったわ。でもこれが生産ラインにのれば戦争が終わるかもって一心で…」カガリ「…」

トール「なんか悪い人じやなさそうだな。」

と安堵した瞬間だった。サイ「あれは…！ザフトのMS！」

ザフトのMSがこのコロニーに入ってきた。

マリュー「これを奪うつもりね…！」

ミリアリア「ど、どうするの？」

マリュー「これを奪われるわけにはいかないわ！」カガリ「でも動かせないだろ？」

マリュー「く…！」マリューは悔しそうに唇をかんだ。

カガリ「仕方ない。私が行く。」

マリュー「え…！？」

カガリ「勘違いするなよ。友達を救いたいだけだ。お前らは逃げる。

トール「大丈夫なのか？」

カガリ「マリューさんには悪いが奪われようが奪われまいがどちらにせよ足止めにはなる。…けど装備が不安だな。」

マリュー「な、ならパックを使って！」

カガリ「パック？」

マリュー「そのMS…『ストライク』の装備よ！近くに『ソードストライカー』があるわ！」

カガリ「わかつた。使ってみる。…ほらみんなは逃げる。」とカガリはストライクに乗り込みソードストライカーを装備した。

カガリ「敵は3機。よし！」

カガリは机体をジンに向かわせた。相手はマシンガンを撃つてきたがPS装甲（フェイズシフト装甲）のおかげで平気だがバッテリーの消費を抑えるため避けつつ接近した。

カガリ「当たれ！」と肩にあるブーメラン『マダインメッサー』を投げた。マダインメッサーは見事ジンに直撃し爆発した。

カガリ「よし…！」今度は腕についているアンカー『パンツィアーアイゼン』を発射しジンの足に巻きつけて引き寄せナイフをコックピットに突き刺した。

カガリ「ラスト！」

ソードストライカー最大の特徴である対艦刀『シュゲルトゲーベル』で最後のジンを切り裂いた。カガリ「これで終わりか……？」と思つたがコックピットの警報がなつた。カガリ「なんだ！」

マリュー「気をつけて！奴らG兵器をもう投入してきたわ！」と通信がはいつた。カガリ「もうか！」と上を見上げると赤い色の『イージス』と白いろに塗装された『シグー』がきた。

カガリ「チッ……！」と舌打ちしたときだつた。

？？？「カガリ！」とイージスから通信がはいつた。

カガリ「……ア、アスラン！？」

＼アスラン said ＼

やつと見つけた！クルーゼ隊長に無理いつて正解だつた。

カガリ「……ア、アスラン！？」むこづから驚いたような声をあげた。

アスラン「なぜ君がそんなのにのつている！？」カガリ「わ、私は友達を助けるために戦つてゐる！そもそもザフトが攻撃したからこうなつたじやないか！」

アスラン「ナチュラルがMSを造るから……！」

カガリ「ここは中立だ！手段を選べ！民間人だつているんだぞ！」

アスラン「これは戦争だ！手段なんて選んでいられん！」

クルーゼ「アスラン！誰としゃべつているのか知らんがこいつを確保するぞ！」とシグーでストライクに蹴りをいた。

カガリ「キャア！」とカガリの悲鳴とともにストライクがぶつ飛んだ。

アスラン「どうすればいいんだ……！」とアスランは唇をかんだ。

### 第3話（後書き）

カガリ「なんか雰囲[気]がずいぶん違うな。」

キラ「うん、みんなを引っ張るリーダーシップもあるし。」

カガリ「…そういう言い方だとまるで私はリーダーシップがないみたいだが職業柄困るのだが。」アスラン「それよりも今回でいろいろ名前でたな。」

ラクス「ストライクやマリコーさんの名前もしましたからね。」

キラ「これからどうなるか楽しみだね。」

アスラン「ああ。じゃあ次回をお楽しみに。」

カガリ「これキラと私の立場を逆にしたんだよな？」

キラ「今更なに言つてるの？」

カガリ「変えてくれないと困るシーンがいくつもあるからな。」

アスラン「例えば？」

カガリ「フレイとの関係。」

キラ「…」

アスラン「…」

ラクス「…」

カガリ「なんで黙る！？不安になるじゃないか！作者！絶対覚えるよー！」

## 第4話（前書き）

前回書き忘れましたが書き方変えました。

カガリ「キャア！」シグーに蹴り飛ばされ吹き飛ばされたストライク。

カガリ「こいつ……！」

シユゲルトゲーベルを振るうがまるつきり当たらない。

クルーゼ「ふん……！その程度か……？」クルーゼも避けながらマシンガンを撃つ。

カガリ「く……！」PS装甲に守られてはいるがそれにも限界がある。バッテリーが切れればそのPS装甲が解除され実弾でも撃墜される。

クルーゼ「これで……む……！」

カガリ「？」

いきなりシグーが別の方向に向かつて飛んだ。

アスラン「隊長？」

クルーゼ「そのMSは任せること……宿命なのかね……ムウ・ラ・フラガ！」

シグーの先には連合軍リベルティマーMA『メビウス・ゼロ』がいた。

ムウ「ラウ・ル・クルーゼ！」

クルーゼ「やはり運命なのかね！」

ムウ「さかしいことを！」いきなりシグーとメビウス・ゼロの戦いが始まってしまった。

カガリ「なんだかわからないが助かる……てないか！アスラン！」

シグーの介入によってすっかり蚊帳の外のイージスに機体を向いた。

アスラン「俺と戦う必要はないはずだカガリ！同じコードィネーターダル！？」

カガリ「分かっているけど……ここには友達がいるんだ！簡単には引けない！」

アスラン「く……！」

ミゲル「アスラン！」

カガリとの会話で集中できないのか押さえぎみになつたアスランを見かねてミゲルがジンに向かわせた。

ミゲル「お前は先に撤退しろ！まだ慣れないだろ！？後は俺に任せろ！」アスラン「…わかつた。」アスランは素直に撤退した。ミゲルなら大丈夫だと思ったからだ。縁服だがザフトでも名が知られているエースだ。捕獲してカガリを連れてくるだろう。だがアスランの予測ははるかに違うものだつた。

ミゲル「ウオオオ！」

ジンを突撃させながらマシンガンを撃つた。

カガリ「…」だがカガリは至つて冷静にバックステップしながら避けた。ミゲル「な…！」さすがのミゲルも驚いた。さつきから一発も当たらないからだ。

ミゲル「クソオオ！」ミゲルは激昂しマシンガンを捨て剣を構えた。カガリ「こい…！」カガリもシユゲルトゲーベルを構えた。ジンは剣を振つただが…ストライクはシユゲルトゲーベルを地面に突き刺しストライクはその上に逆立ちのような姿勢になつた。

ミゲル「な…！」

ジンの剣はストライクではなくシユゲルトゲーベルに当たつた。ストライクはジンの後ろに着地しシユゲルトゲーベルを振つた。

カガリ「ハアアア！」

ジンも突然のことでの反応できなかつたなかつたのか棒立ちだつた。シユゲルトゲーベルはジンを横一文字に切り裂いた。

ミゲル「グオオオ！？」ドーン…ジンは爆発した。

一方シグーとメビウス・ゼロは一進一退の戦いを繰り広げていたがメビウス・ゼロが少々不利だ。ムウ「くそ…！」

ムウは焦つた。その時ストライクがジンを撃墜していた。その動きは素人のものではなかつた。

ムウ「凄いな…。」と感心した瞬間機体が揺れた。どうやら被弾したようだ。

ムウ「これまでか…！」ムウが諦めかけた時だ。横からビームが飛んできた。シグーに向けられたものだ。ムウが見た先には白亜の戦艦がいた。

ムウ「アークエンジエル！やつときたか！」

ナタル「大尉、遅くなりました。」通信にでたのは女性士官だった。

ムウ「助かったぜ！でも艦長は男って聞いていたんだが…？」

ナタル「…クルーはほとんどが死亡しました。少數しかいなかつたので発進に時間がかかりました。」

ムウ「…そうか。とりあえずそつちに着艦する。」

ナタル「了解しました。ストライクのほうは…」といいかけたとき、通信がはいった。

マリュー「アークエンジエル応答して…」あらマリュー・ラミアス

大尉。

ナタル「大尉！無事でしたか！」

マリュー「なんとか…。こちらもやられたわ。」ナタル「そうでしたか…。ストライクはどうするんですか？誰が乗っているんですか？」

マリュー「事情はそちらで話すわ。とりあえずそつちに合流します。」と通信切った。

ナタル「誰ですかその民間人は？」

マリューと合流したナタルはそう質問した。

マリュー「このコロニーの住民みたいだけど脱出できなかつたなかつたところを保護しました。問題でも？」

ナタル「ストライクは機密事項ですよ！民間人に触れさせるわけには…」マリュー「もう遅いわ。」といったとき、ストライクのコックピットから誰かが降りてきた。

ナタル「まさか…！」

マリュー「民間人が操縦していたもの。」

降りてきたのは金髪の少女だった。

ムウ「まさかあの子が？」

マリュー「ええ…。」

ムウは驚いた。あんなダイナミックな操縦をしていたのが年頃の少女だったからだ。

カガリ「いたた…。」

ミリアリア「カガリ大丈夫？」

カガリ「ああ…さっき吹き飛ばされたとき腰打つただけだ。心配ないさ。」と腰を抑えながら答えた。

マリュー「ごめんなさい…こんなことに巻き込んでしまって…。」

カガリ「ああもう大丈夫ですよ。」

ムウ「慣れているのか？」

カガリ「あんたは？」

ムウ「俺はムウ・ラ・フラガ大尉だ。さっきのメビウス・ゼロのパイロットだ。感謝しろよ？俺が来なかつたら今頃やられていたぜ？」  
カガリ「お前だってやられていたじゃないか。」ムウ「…最近の若者は態度がなつていいないな。それより君はコーディネーターだろ？」  
ナタル「え…？」

カガリ「…ああそうだ。」と答えた瞬間カガリに周りの連合兵が銃を向けた。

トール「やめてくれ！」ミリアリア「カガリは私たちを助けただけよー。」マリュー「そうよ…。銃を降ろしてちょうだい。」

連合兵「しかし…！」

ムウ「やめるんだ。…なんで君はコーディネーターなのに俺たちを助けた？」

カガリ「私は友達を救いたかっただけだ。」  
とムウたちを睨んだ。

ムウ「わかった。信用しよう。」

マリュー「ありがとうござります。」

カガリ「そんなことよつばりで脱出するんだ? 外にまだザフトがいるかもしれんぞ?」

ムウ「この嬢ちゃんの言つ通りだ。俺の機体はさつきので修理する必要がある。アーチエングエルだけじゃもたないな。」マリュー「そのことなんだけど… カガリさん。またストライクに乗つてくれないかしら?」

サイ「なにを言つていいんですか! ? もう関係ないでしょ! 」マリュー「「めんなさい… これしか生き残る方法はないわ。… どうするの?」

カガリ「… わかった。私も生きたいからな。」

マリュー「いいの?」

あつさりと承諾したのでマリューは驚いた。

カガリ「一言はない。私がみんなを守つてみせる!」

## 第4話（後書き）

アスラン「ミゲルいつも通りに逝ったな。」「キラ「いつも通りつて…まあいいや。」

ラクス「今回アークエンジェルの主なメンバーがそろいましたね。」「カガリ「それにしても私凄い戦い方したな。」

キラ「ミゲルを撃墜したときの動きは龍がく見のヒー アクションを参考にしたらしいよ。」「アスラン「また凄いゲームから参考にしたな。いいゲームだが。」

カガリ「でも作者はPS3持っていないから動画を見て参考にした。欲しいな…とくに4がやりたい」 作者の愚痴

アスラン「まあそこまでにしろ。次回は…」

ラクス「ランチャーストライカーが登場します。」

アスラン「つておい！それだけ？」

キラ「まだあるよ。フレイと」

カガリ「でなくていい。」 貞操的な意味で

## 第5話（前書き）

短いです。

カガリ「今度は射撃に特化したパックか?」。

カガリはストライクにランチャーストライカーを装備させた。

「マジニード「アケニ」を使用する際に『を』一ヶだけハッテリ一かたくさん消費するから。」

カガリ「了解した。行くぞ！」

スエリイケが飛び出しこはなくすなどか、上のMSをかいた  
シングル装備が要塞攻撃型の装備になります。

カガリ「あいつら……！」）』と破壊する気か！」ザフトは『』が中立ではないと判断したのだわ。

ガカリ これが単等か でれが てる  
かにとな……」 ガカリは怒りが込み上げた。

卷之二

カガリ「な……！」「ローラーの壁まで！」

アグニはジンを貫いても威力が衰えることがなく、コロニーの壁まで貫いた。だがさつきのジンが最後だつたのか機影はなかつた。カガリ「もう終わったのか…？」そう思つた瞬間だつた。

エロ二「かしいきなり崩れだしたのだ。」シヤフトや柱も歪み、エロ二の壁に何個か穴が開いた。そこからストライクが吸いだされた。

カガリ「ううん……。

どこか頭を打つたのか気絶していた。ストライクがいるのは宇宙だった。カガリ「コロニーは…？」さつきまであつたヘリオポリスが

なかつた。これが現実。これが戦争とカガリはぼんやりと考えた。  
カガリ「アークエンジェルは…？」しばらくアークエンジェルを探していると脱出ポットがあつた。カガリはそれを回収した。と同時にアークエンジェルも見つけた。無事だつたらしい。

カガリ「凄いなこの艦は…。」

トール「それよりも早くポット開けてみようぜ。」

連合兵がいくつか操作してポットを開けた。そこには…

サイ「フレイ！」

フレイ「サイ！よかつた無事だつたのね！」

出てきたのはカガリが通う学校のアイドルでサイの恋人のフレイ・アルスターだつた。

あとクラスメートのかズイ・バスカークもいた。トール「よおカズイ！お前も無事だつたか！」

カズイ「うう…怖かつた…。」

カガリ「これで全員か…。あとは無事脱出したのかあるいは…」

ミリアリア「よしてよカガリ…考えたくないわ…。」

カガリ「あ…すまない。」

ナタル「また民間人が増えた…。喜ぶカガリたちとは対照的にナタルは頭を抱えていた。

マリュー「私が艦長に…ですか？」

ムウ「ああ、俺は君と同じ階級だが船のことはあまりわからない。任せせるよ。」

マリュー「…わかりました。マリュー・ラミアス大尉、任につきます。」とはいつたものの、やはり不安があつた。民間人はいるし、ストライクはコーディネーターが乗っている。クルーも少ない。マリュー「大丈夫かしら…。」マリューはそう呟くしかなかつた。

## 第5話（後書き）

カガリ「フレイ出てきあまつた…。」「

フレイ「私だつてそんなシコミはないわよ！」

キラ「大丈夫だよ。作者この手のこと苦手だからね。」

カガリ「な…！心配して損したじやないか！」

フレイ「よかつた…。？じゃあ私どうなるの？」キラ「原作より地味になると思うよ。」

フレイ「それは避けられないわね…。せめてパパが生き残つてパパと一緒に帰るつていう展開にしてほしいわ。」

カガリ「それを決めるのは作者だからな。お楽しみつてとこだな。アスラン「さて次回は…」

ラクス「やつとホールストライカーが出ますわ。」

カガリ「本当にやつとだな。作者いくつかの戦闘とばしたいとかほざくし…。」

ザフトのみなさん「俺たちが地味になるだらうが―――！」

カガリ「Gジヒネの続報がでたな。」

キラ「作者は3DS持つてないけどお年玉で買うみたいだよ。」

アスラン「精神コマンドか…。ますますスペボみたいだな。」

ラクス「まあ例の」とぐづつかの誰かさんは必中が遅いでしょうね。」

「

ルナ「くしゅん！」

メイリン「お姉ちゃん風邪？」

ルナ「誰かが私の噂したきがして…。」

メイリン「そんなことより射的やつてあれほしいから。」

ルナ「わかったわよ。全弾当ててみせるわ！」

メイリン「全弾…なんだっけ?  
ルナ「あれ、おかしいわね…?」

例の「ことく外した。

ムウ「嬢ちゃんパイロットスーツのサイズはあつか?」

カガリ「…ああ大丈夫だ」

ムウ「そうか。ウエストがきつくて着れないかと思ったが」

カガリ「私は結構瘦せているぞ!失礼なこというな!」

ムウ「悪かったよ」

カガリはパイロットスーツを選んでいた。さすがにいつまでも私服でいるのはきつい。

カガリ「そういえばどこに向かっているんだ?」ムウ「ああ…そのことだが…。今から水を補給しにユニウスセブンに行く」

カガリ「そうか…あそこには凍った水があるからな。墓泥棒みたいな真似で嫌だな…」

ムウ「コーディネーターだから気分が悪いのは分かるが生きるために

だ」

カガリ「コーディネーターだからとか関係ない。モラルとかそんな感じに行つただけだ」

ムウ「…まあから思つたんだが…君は本当にMSに乗つたのははじめてか?なんか場馴れしてるつていうか同類のコーディネーターをためらいもないし…」

アークエンジェルはこれまでザフトと交戦したがカガリとムウ…まあほとんどがカガリの活躍でここまで来た。

カガリ「…そんなのどうでもいいだろ?手心加えて落とされたら嫌だろ?」

ムウ「まあ…そうだが…」

カガリ「…さてと墓荒らしにいきますか」

とカガリはパイロットスーツを着て格納庫に向かつた。ムウはカガリに対する不信感をぬぐえないでいた。

カガリはエールストライカー装備のエールストライクに、ミリアリアとトールは作業用スーツに乗り、水資源を回収していた。

ミリアリア「不気味なところ…」

トール「ああ…死体もあちこちにあるし…」

このユニウスセブンは連合軍の核攻撃に遭い、多数のコーディネーターが死亡した。

カガリ（そういうえばアスランの母さんもここにいたんだな…）

幼い頃、料理を作ってくれた思い人の母の顔が思い浮かぶ。ともにふけつているとコックピットのアラートがなった。レーダーで確認すると偵察型のジンがいた。なんでここにとは思わなかつた。むしろ当然だと思つた。

だがジンはこちらに気づいていない。

カガリ「そのまま通り過ぎるよ…！」

だがカガリの願い空しくジンはこちらに気づき狙撃してきた。

カガリ「そのまま見逃せばいいものを…！」

カガリはストライクのビームライフルでジンを撃破した。

ナタル「…君は拾いものが好きだな…」

マリュー「いいじゃない。人命救助も」

カガリは帰還中にポットを見つけ回収していた。が、そのポットがザフトのものだつたので警戒して銃を構えている。

マードック「さあ…開けますぜ」

と恐る恐る開けた。そこから…

? ? ? 「ハロ、ハロ！」

「「？」」「？」

? ? ? 2 「みなさん」苦労をまです」

そこから球型のロボットとピンクの色をした髪の毛を持つ女性が出てきた。

? ? ? 2 「…あら?」これはザフトではないのですか?」

女性はここにいるのがザフトではないとわかると困惑していた。

ムウ「… あれば誰なんだ?」

マリュー「名前はラクス・クラインだそうよ」

ムウ「クラインつてまさか…！」

ナタル「ええ…あのザフトの現議長シーゲル・クラインの娘だそうです」ムウ「あちゃーなんちゅうもん拾つてきたんだあの嬢ちゃんは…」

マリュー「悔やんでも仕方ないわ」

ムウ「で、いま娘さんはどこに?」

マリュー「今はカガリさんと一緒にいるわ。コーディネーター同士

だし女性同士だから彼女に任せたわ」

ナタル「これから大丈夫だろうか…」

と大人たちはため息をするしかなかつた。

カガリ「え…お前アスランと婚約しているのか…」

ラクス「はい。アスランのことをご存知ですか?」

カガリ「幼なじみなんだ…」

ラクス「そうなのですか…。じゃああなたはなぜナチュラルのみなさんと一緒に戦っているのですか?」

カガリ「友達を守るためだよ」

ラクス「…それだけですか?」

カガリ「…ああ」

ラクス「降伏すれば全員の命は救われると思いますが」

カガリ「…あいつらがそんなに優しいとは思えんが?」

ラクス「私が身の安全を保障させます。だから…」

カガリ「…好意だけ受け取るよ。だけどそれはいけない」

ラクス「なぜそこまで拒否するのですか? コーディネーターですのに…話していく思つたのですがあなたはときどき遠くを見ることがあるのであります。あなたが戦う理由は別にあるよううな…」

カガリ「…話はこ」」までだ。部屋にいろよ」

ラクス「カガリさん…！」

カガリ「…一つだけいう。私は…『力』が欲しかった。全てを守る

『力』が…」

と意味深なことをいつて部屋をあとにした。

## 第6話（後書き）

キラ「ついにラクス登場！」

アスラン「前回エールでるつていつたのにちょっとしかでていないと  
んだが…」

カガリ「まあいきあたりばつたりだからな

フレイ「それをいつちやおしまいよ」

ラクス「次回は私が人質にされてしまつ回でしたわね」

カガリ「なんだ根にもつてるのか」

ラクス「そこまで器は小さくありません」

ラクスの尋問が終えたあとカガリは食堂にいった。

ミリアリア「あ、カガリ終わったの？」

カガリ「あとりあえずな」トール「ラクス・クラインか。確かに  
プラントで有名な歌手だよな」

カガリ「そうなのか？」カズイ「でも…あれも遺伝子をいじつて  
の歌唱力を持つているんだよね…」

フレイ「ただのズルじゃない！だからコーディネーターは嫌いなの」  
カガリ「…フレイ私もその『ズル』したコーディネーターだが」

フレイ「だからなに？悪口を言つなつてこと…？」

サイ「フレイよせつて…！」

フレイ「ふん…！」

フレイは気分を悪くしたのか食堂から出ていつてしまつた。サイも  
その後を追つた。

ミリアリア「…いいの？」

カガリ「もう慣れた」

と答えたあと食事をした。

カガリが去つた後、ラクスはカガリのことを考へた。自分の婚約者が幼なじみだつたことやコーディネーターでありながらナチュラルの…友達を守るために戦う。理由に筋は通つてゐるがなにかひつかかる。単に友達を守るためだけだろうか。

ラクス「なにか別の意思がありそうですわね…」ラクスは悩んだがそれを後回しにしてアスランのことを考えた。確かに政略結婚だが自分もアスランのことは好きだ。だが幼なじみがいるといえば話しあ別。できれば身を退きたい。

ラクス「…また話してみたいですわ…」

アスラン「ラクス大丈夫だろうか…」

クルーゼ隊はアークエンジュエルの追跡任務中にラクス行方不明の知らせを受けて捜索任務にあたっている。

イザーク「ふん！お前の婚約者だからな。大丈夫だろ？」

アスラン「ちょっと待てどういう意味だ？」

イザーク「想像に任せるとよ」

ニコル「イザークやめてください…」

ディアツカ「まあ婚約者を心配するのはいいけどリラックスしろよ」

イザーク「貴様はリラックスしそぎだ！」

アスラン「それよりも今度はお前らだろ偵察早く行けよ。うるさいから」

イザ・ディ「だとコラアアアア…」

クルーゼ「なに騒いでいる？早く行かないか！」イザ・ディ「了解

…

二人は部屋から出ていった。

アスラン「ふん…」

ニコル「アスランイライラする気持ちはわかりますけどあたらないでください」

アスラン「すまない。最近色々あつてな」

ニコル「ラクス様のことですか？」

アスラン「それだけだつたらどれだけいいか…」アスランは聞こえないようにつぶやいた。

フレイ「パパが来るの！？」

マリュー「ええ、あなたのことをいつたら会いに来るらしいわ」

フレイ「よかつた…！」フレイの父親は事務次官で高い地位にいる。

ムウ「でもザフトも察知するだろうな。俺と嬢ちゃんだけで大丈夫か？」マリュー「無理も承知だけどがんばつてもうつしかないわ」

ムウ「まじかよ…」

ミリアリア「…さっきのことで機嫌が悪いと思つたフレイのお父

さんがいるの。助けてあげて」カガリ「…あの程度で機嫌が悪くならん」

ミリアリア「ありがとう…。ストライク発進どうぞ!」

カガリ「カガリ・ヤマト、ストライク行くぞ!」エールストライクは戦場に飛び出した。もうすでにザフトと交戦しており連合が劣勢だ。

カガリ「ええい!」

ストライクはビームライフルで敵を次々と撃破した。ムウのメビウス・ゼロもガンバレルで撃破した。しかし…

サイ「熱源接近!これは…!Gシリーズです!」ナタル「こんなときには!?」

ストライクとメビウス・ゼロはGシリーズと交戦に入った。ストライクはイージスとデュエルと、メビウス・ゼロはバスターとブリッツと。

イザーク「こいつ…!」アスラン「カガリ…まえより動きがいい!」イージスとデュエルは2対1なのに関わらず、苦戦していた。攻撃がなかなか当たらずストライクに反撃される。ヒット＆アウエイを心得ている。イザーク「こいつー!」デュエルは突っ込んだが、ストライクに蹴られ吹き飛ばされる。

アスラン「イザーク…カガリやめてくれ!戦いをやめろ!」

カガリ「お前こそ!あの艦には友達の親が…」

といいかけた時だ。

ナタル「ザフトに告ぐ!我々はプラント最高議長の娘ラクス・クラインを保護している!戦闘を中止せよ!この勧告が守られない場合責任放棄とし我々がしかるべき措置をとる!」

カガ・アス「!!!」

アークエンジェルからそう全域に通信が入った。簡単にいえばラクスを人質に取つたのだ。

が、時すでに遅くバスターがフレイの父親が乗つた艦を破壊していった。

フレイ「イヤアアアアー！」

サイ「フレイ！…艦長、フレイを医務室に連れていきます！」  
マリュー「ええ、お願ひ！」

アスラン「カガリ…これが君の守るものか…？」

カガリ「…」

アスラン「必ず取り戻す…！」

カガリ「…るさい」

アスラン「？」

カガリ「うるさい黙れ！」

アスラン「カガリ…？」カガリ「私だつて知らない！こんなこと…  
それに…」

このときカガリは知らなかつたが周波数がラクスのいる部屋の通信装置にもあつた。ラクスは部屋にもどると突然の大声に驚いた。

ラクス「カガリさん…？」

カガリ「突然プラントに戻つたと思えばザフトに入つて婚約者もいる！？ふざけるな！私はお前に再会することを楽しみにしていたのに！いたのに…！」

途中から涙声も混じつた。

カガリ「…グス、お前だつてヒック…裏切つたじゃグス…ないか…」  
アスラン「カガリ…」

カガリ「…ラクスは絶対にお前のところにかえす。それでいいだろ…！」アスラン「カガリ俺は…！」カガリ「…じゃあな」

ストライクはアークエンジュエルに向かつた。

アスラン「…くそ！俺は…！」

カガリは帰還する途中アスランのことを考えまた涙があふれた。  
カガリ「…グス、なんだよヒック…。く…うつう…ウアアーン！」

## 第7話（後書き）

キラ「え、まさかの三角関係…！」

アスラン「ラクスは身を退こうとしているがカガリは諦めかけている…どうなるんだ？」

フレイ「それよりも！パパ死んじゃったじゃない…！」「…」

ラクス「三角関係の前ではどうでもいいですわ」カガリ「うあい！」  
キラ「これでフレイもどうなるかわからないね」フレイ「せめて生き残れますように…！」

アスラン「どうなるかな…。次回はラクスの返却の話しだ。」

キラ「三角関係はどうなるかな…？」

アークエンジェルに帰還したカガリにフレイが怒鳴ってきた。

フレイ「あなた！なんでパパを守ってくれなかつたの！？」

カガリ「…」

フレイ「自分がコーディネーターだから手加減していたんでしょ！？」

カガリ「…」

カガリは黙つたまま拳を握つていた。

フレイ「なにかいいなさいよ…！」

とフレイはカガリの頬を張つた。

ミリアリア「ちょっとフレイ…！」

フレイ「なんでとめるのよ！？」いつが本氣でパパを守らないから

…！」カガリ「…本氣でやつたよ…！」

カガリが口をひらいた。カガリ「なんも確証もないのに適当なこと

いうな…！」

フレイ「なによ！パパを救えなかつたくせに…」カガリ「勝手に人質を使うお前に言われる筋合はない！」

フレイ「使えるものを使つただけだわ！どうせあいつはここでしか役に立たないわ！あなたたちパイロットも戦うしか役に立たないわ！」

といった時だ。

ガン！

カガリの拳がフレイの頬をかすめ壁を殴つた。

カガリ「…次私達をそんなふうにいつたらてめえの顔世間に出来ないようにするからな…！」

フレイ「ヒ…！」

カガリは着替えに口ツカーへ向かつた。

ミワアリア「カガリ…」フレイ「なんのよ…！」

カガリは自室に戻りベッドに横になっていた。アスランのことを考えていた。

カガリ「くそ…なんだよ…」

カガリとアスランは幼なじみで性格は逆だがなぜか気があった。カガリはすぐ熱くなりアスランによくからかわれていた。年月が経つにつれお互い愛しあっていた。周りから「この二人は将来絶対に結婚する」と言われるほど。だが敵同士になつたいま殺し合う間になってしまった。そしてアスランには婚約者がいる。カガリ「…あいつのどこに行くか…」

カガリはあいつ…ラクスのところに向かつた。

カガリ「…入るぞ」

ラクス「カガリさん…よくいらっしゃいました。また会いたかつたですわ」

カガリ「…そうか」

ラクス「…さつきのアスランのやり取り聞きました」

カガリ「…」

ラクス「あなたの思いはわかりました。…確かに私とアスランは婚約しています。しかしこれは政略結婚ですので…」

カガリ「…だからなんだよ」

ラクス「あの…お互い好きとかそういう感情は…」

カガリ「もういいよ…」ラクス「カガリさん…？」

カガリ「私達はもう敵同士なんだ。私はアスランのこと好きだけどアスランはもう…」

ラクス「諦めてはいけません！」

ラクスがいきなり立ち上がった。

ラクス「確かにあなたたちは敵同士です。だからなんですか！？あなたは好きなんでしょう！アスランのことが…ならないじゃないで

すかそれで！」

カガリ「ラクス…」

ラクス「今度会った時思いをもつとぶつけなさい。アスランも分かつてくれるはずです」

カガリ「ラクス…ありがとう」

ラクス「当然のことです。友達ですから」

カガリ「友達…？」

ラクス「ええ、私達はもう友達ですわ」

カガリ「…ありがとう」カガリは嬉しそうに笑った。

カガリは部屋から出たあとマリューに会つた。

マリュー「カガリさんお疲れさま。さつきの戦闘は…」

カガリ「守りきれなかつたのは私の落ち度だ…。人質の件はフレイの独断ですよね」

マリュー「ええ…そのことなんだけど…」

カガリ「何かあつたんですか？」

マリュー「もう少しで大気圏近くなんだけど…そこで連合の部隊と合流するの」

カガリ「え…？じゃあ…！」

マリュー「ラクス・クラインも引き渡されるわね…」

カガリ「そんな！なんとか…！」

マリュー「残念ながら避けられないわ…」

とマリューはブリッジに向かつた。

カガリ「なんだよ…！…仕方ない…！」

カガリ「ラクス！」

ラクス「カガリさん…？どうなさつたのですか？宇宙服を持つて…」カガリ「お前をザフトに返す！」

ラクス「え…？」

カガリ「お前を連合に渡すわけにはいかない！」カガリはラクスに

宇宙服を着せると格納庫に向かつた。

カガリとラクスはストライクに乗り、アークエンジエルを出た。途中でアスランが一人だけ来るようザフトに通信をいれた。

カガリ「これでよし…」ラクス「ありがとうございますこんなことをしてくださいって

カガリ「いいんだよ。それに私達友達だろ?」  
ラクス「…ハイ！」

カガリ「さてと来たか…」

通信の通りイージス一機で来た。

アスラン「カガリ…」

カガリ「…ラクスは返す。約束通りな…」

ラクスはイージスに飛び乗つた。

ラクス「アスラン」きげんよう

アスラン「怪我は？」

ラクス「ないですわ。カガリさんが優しくしてくれました」

アスラン「そうか…」カガリ、今回のこととは礼を言つ

カガリ「…当然のことをしたまでだ」

アスラン「…カガリ…あのさ…ごめん！」

カガリ「なんだいきなり」

アスラン「突然プラントに行つたり婚約したり…。君のこと考えなくて…」

カガリ「…私も悪かったよ。さつきは子供みたいに怒鳴つて…」

ラクス「よかつたですわ仲直りして…」カガリさん。あなたはこちらにこないのでですか？」

アスラン「ラクス言う通りだ…。こっちに来てくれ」

カガリ「…ごめん」

カガリは謝つただけだ。アスラン「なんで…」ラクス「あなたは本当に友達を守りたいだけなのでですか？」

カガリ「…そうだよ。それに…お前とは一緒にいられないんだ」

アスラン「どうして……？」

カガリ「以前とは違うんだ……。体も心も……。知つてしまつたから……」  
カガリはストライクを反対側に向けて飛び去つた。

アスラン「……なんだ……？一体力ガリに何が……」

ラクス「何かあつたのでしょうか……。あなたがたが別れて再会する  
までに……」

## 第8話（後書き）

キラ「最初のカガリ怖いよ！」

カガリ「フレイが悪いんだ」

アスラン「まあとりあえずラクスを無事にザフトに返したわけだ

ラクス「最後カガリさんは何を言いたいのでしょうか？」

カガリ「それはお楽しみつてことで」

キラ「思つたんだけどさ」

アスラン「どうした？」キラ「Gジエネにイグルー2出れるかな？」

カガリ「微妙だな…。2話と3話の奴は機体が出るし」

アスラン「1話は？」

カガリ「オペレーショント イでやれ」

バーバリー「…泣けるで」

キラ「なんであなたがいるの…」

## 第9話（前書き）

更新遅れています。すみません。

ラクスをザフトに返したカガリに待っていたのは…トイレ掃除とう罰だつた。

カガリは素直にアークエンジェルに帰還したがマリューにこっぴどく怒られた。本来なら銃殺刑だがストライクを動かせるのがカガリしかおらず、こうしてトイレ掃除をしているのだ。

カガリ「…たく、女の子にやらせるかなこんなこと…」

ムウ「まあ、自業自得だから仕方ないんじゃない嬢ちゃん?」

カガリ「嬢ちゃんはやめてくれ! それとこには女子トイレだぞ!」

ムウ「掃除中だからいいじゃん」

カガリ「よくない! 用がないならどうかにいけ!」

ムウ「ハイハイ

ムウはトイレから出ていった。

ラクスを取り返したアスランはラクスを見送りにいった。

ラクス「すいません私のために…」

アスラン「いいんだ、謝らなくても。議長にまた会いに行きますつていつてくれ」

ラクス「はい…。アスランはお父様にお会いにならないのですか…?」

アスラン「前報告のときに話したよ…。ハア…」ラクス「どうしたのですか?」

アスラン「あまり話したくないんだよ…。口を開くとナチュラルの悪口ばかりだ…。母さんを亡くしたのはわかるけど…」ラクス「うまくいってないようですね…」

アスラン「まあな。次期議長の候補…まあほぼ確定だが。なつたら世論は変わるな…」

ラクス「アスランのお父様は強硬派で有名ですからね……」

アスラン「……本当に嫌なんだ……戦うことは……。カガリと会つてから  
ますます……」

ラクス「本当にカガリさん思いですわね」

アスラン「……すまない婚約者なのにこんなこといつて」

ラクス「別にかまいませんわ」

アスラン「すまない……。さあ……もうじつてください」

ラクス「わかりました。……アスラン」

アスラン「なんだ……？」ラクス「最後まで諦めないでカガリさんと  
お話ししてください。好きな人と殺し合つのはもういやですわ」

アスラン「……わかつた」

アークエンジェルは少しで地球連合艦隊と合流するところだ。

ミリアリア「もうすぐ地球ね……」

トール「久しぶりだな……。そういうば連合と合流するけどそこで民  
間人は降ろすつてさ」カズイ「ほ、本当！？」ミリアリア「でも私  
達は一時的とはいえオペレーターをやつたからね……。降ろしてくれ  
るかな……？」

トール「まあ俺たちはともかくフレイは？」

サイ「……降りるってさ。もうこんなところにいられないって怒つて  
た」

ミリアリア「やつぱりお父さんのことショックだったのね……」

トール「……カガリはどうするのかな？」

ミリアリア「降りる……かな？」

サイ「コーディネーターと戦つているからな降りるだろ？」

トール「そうか……？」

カズイ「なんか最近……怖いんだ……カガリが……。同じコーディネータ  
ーなのに容赦ないし……」

ミリアリア「そんなこといわないの！私達を守るために戦つてている  
だけよ！」

これまで何度もザフトの襲撃をうけたがカガリのおかげでここまで

で生き延びた。が、カガリは同じコーディネーターに容赦がなく先日もデュエルのコックピットを傷をつけた。パイロットは無事だろうが怪我はしただろう。今までの戦いにトール達は恐怖を感じた。

カガリはトイレ掃除が終わり部屋に戻ったがマリューにブリッジに呼び出された。

カガリ「今度はなんだ…どこ掃除だ…？」  
とブツブツ言いながらブリッジに行つた。

マリュー「きたわね」

カガリ「…なんでしょうか」

マリュー「もうすぐ連合軍と合流するのは知ってるわね」

カガリ「ええ…」

マリュー「そこで民間人も降りるけど…カガリはどうするの？あなたもなしきずしに乗つたとはいえ民間人でしょ？」

カガリ「だから私には降りる権利はあると…？」マリュー「ええ、どうするの？」

カガリ「…とつぐに決まっています」

マリュー「…じゃあ降り…」

カガリ「パイロット続けるよ」

マリュー「…はい？」

ムウ「へ？」

ナタル「え？」

カガリの答えにマリューだけではなくムウやナタルも驚いた。

カガリ「だからストライクに乗るよ」

マリュー「で、でも…」カガリ「…確かに私は民間人だしコーディネーターだけど周りのこと何も知らなかつた…。中立のコロニーにいることで戦争という現実から目を背けていたんだ。ストライクに乗つていて感じたよ。こんな戦争は早く終わらせたい…！」

ムウ「でも嬢ちゃんはこれから同族と戦うことになるぜ。覚悟はあるのか？」

カガリ「…できています！」

ムウ「だとさ…どうする艦長？」

マリュー「…わかったわ。軍に入る手続きは今流してからよ」

カガリ「ありがとうございます！」

カガリは笑顔で礼を言いブリッジをあとにした。ナタル「いいのですか？」

マリュー「…あそこまで言つたもの。覚悟は本物よ」

ムウ「まあこれからどうなるかねえ…」

ブリッジをあとにしたカガリは部屋に戻つた。

カガリ「…我ながらよくあんなこと言えたな…。…」それで戦える…

！それが…私の存在する意味だからな…！」

## 第9話（後書き）

キラ「…もうカガリがどこに行きたいのかわからない」

アスラン「…怖いんだが…」

シン「将来あれと戦うのかよ…」

アスラン「つて普通にでてくるな！出番はまだ先だろ！」

シン「いや作者が出演OKしてくれたら出たんだけど…」

カガリ「作者はシンのこと嫌いと聞いたが…」

ラクス「たぶんろくなことに使われないかもしませんわ。 例えば

ハツ当たりされる係とか…」

シン「そんなことないですよ。 ねえみんな」

「…」

シン「なんで黙るの！？不安なんだけど！」

キラ「次回は…フレイファンの人ごめんなさい」 フレイ「?なにその次回予告！」

## 第10話（前書き）

今日は少し長いです。

アークエンジェルは無事にハルバートン率いる第8艦隊と合流した。  
ムウ「ハルバートン提督か…。確か艦長の上司にあたる方だよな?」  
マリュー「ええ、彼がアークエンジェルとXナンバーの開発計画を  
後押ししてくれたのよ」

ムウ「よく説得してくれたよ。頭の堅い上層部を」

マリュー「ええ…。それよりもカガリさんのことだけ…」

ムウ「嬢ちゃんはああいきこんじやいるけど…許してくれるかねえ  
…」

カガリは一人で食堂で食事をしていた。そこにミリアリア達が来た。  
ミリアリア「カガリ！あなた軍に志願したつて本当？」

カガリ「そうだが？」

カガリは当たり前のよう答えた。

トール「いや、当然だみたいに答えられても…」

サイ「何を意味するのかわかつてるとか？」

カガリ「…わかってるよ。同胞を殺すことになるかもな」

トール「だつたら…！」

カガリ「私達が艦を降りても戦争は続いているんだ。なにも変わらない。だから…私がこの戦争を終わらせてみせる」

ミリアリア「本気…？」

カガリ「ああ。なあに」コーディネーターがナチュラルのこと認めた  
らすぐ終わるよ」

サイ「しかし…」

カガリ「そんなことよりもお前らは降りるだろ？」「に残る意味もないしな」

トール「…いや、俺は残る」

予想もしなかつたトールの答えにカガリは驚いた。

カガリ「お前なにいつてるんだ！？」

トール「カガリがさつき言つたように降りても戦争は続いているんだ。どっちも一緒だからな。だつたら残つて戦争を終わらせるために戦う方がいいだろ？」

サイ「トールの言う通りだな…。俺も残る」

ミリアリア「だつたら私も！」

カズイ「なら僕も…」

カガリ「おいおい…」

カガリはあきれて頭をかかえた。

カガリ「…本気かよ…」

「「本気だ！」」

四人がそろつて言った。

カガリ「…わかつたよ。艦長には…なんか用事があるみたいだからフラガ大尉にそう言つてこいよ」

トール「そうするよ！」

とトール達は食堂から出ていった。

一方ブリッジにはマリューとナタルとメネラオスから来たハルバートンがいた。

ハルバートン「よく無事だつたな！ヘリオポリスが崩壊したと聞いた時は駄目かと思ったよ」

マリュー「ありがとうございます閣下」

マリューとナタルは敬礼をした。

ハルバートン「4機のXナンバーが奪われたのは痛いがストライクだけは無事だつたのは幸運だな…」

マリュー「ええ…そのことですばパイロットのことは存知ですかね？」

ハルバートン「ああ…民間人のコーディネーターだそうだね」

マリュー「はい…。その子が軍に志願しているのです」

ハルバートン「なんだと？」

ナタル「大尉の言う通りです。本人は本気のようですが…」  
ハルバートン「むう…。…その子を連れてきてくれないか?話がしたい」

マリュー「わかりました」

とマリューが呼びに行こうとしたときにムウがブリッジに入ってきた。

ムウ「艦長…。…失礼しました閣下!まだお話中でしたか」

ハルバートン「構わないよ。で、どうしたのかね?」

ムウ「ヘリオポリスの子供達が軍に残るつて言い出して…」

マリュー「え…?」

ムウ「まあ動機は十分ですけど…。どうする?」

ナタル「他はいいとして…。ストライクのパイロットは残つてほしいところです」

ムウ「嬢ちゃんか…」

マリュー「ええ…今から呼びに行くわ」

とマリューはブリッジから出ていった。

しばらくしてマリューがカガリを連れて戻ってきた。

カガリ「この人は?」

マリュー「ハルバートン閣下よ。MSの開発の後押しをしてくれた人よ」

カガリ「どうも…」

カガリはお辞儀をした。

ハルバートン「君がストライクのパイロットか…。今までアーケュンジエールを守つてくれてありがとう」

カガリ「そんな礼なんて…!私はただ友達守りたかっただけですから…」

ハルバートン「もうすぐ連合軍はアラスカに降りるし、民間のシャトルもある。残る理由はないと思うのだが。ましてや君はコードィ

ネーターだろ？」

カガリ「わかつてます。でもただ戦争の恐怖に怯えているのもいやだから……」

ハルバートン「それで君が戦争をとめるために戦うと  
カガリ「はい！」

ハルバートン「…あまり自惚れないほうがいい。君個人の力だけで  
なんとかなるようなものじゃないぞ」

カガリ「でも私強いですから！」

ハルバートン「やはり若いな…。敵を撃つだけでは終わらんぞ？」

カガリ「だけど…」

ハルバートン「軍に残るのは許可する。だけどそのなかで学べ！…  
以上だ…。私は戻る」

マリュー「了解しました…」

マリュー達はハルバートンを見送つたがカガリはうつむいていた。

カガリ「戦争つて勝てばいいんじゃないのか…！」  
と小声で怒った。

一方格納庫では民間人のシャトルの乗り込みが行われていた。

フレイ「え…？じやあサイは軍に残るの！？」

サイ「ああ…。しばらく離ればなれになっちゃうけど戦争が終わっ  
たらまた会おう」

フレイ「…わかつたわ。早くコーディネーターを全滅させてね！」  
と笑顔で言った。

サイ「おいフレイ…！不謹慎だぞ…」

フレイ「なんで？それがこの戦争の目的でしょ？」

先日父親を殺されてからフレイの精神は異常だつた。コーディネー  
ターに対して凄い暴言をはきまくつたのだ。

サイ「…もうシャトルいつちやうそ」

フレイ「ええ…じゃあね…」

とフレイはシャトルに乗り込んだ。

このときは想像がつかなかつた。まさかあんなことは……。

連合艦隊が大気圏突入態勢に入ったところに思わぬ介入があつた。

ミリアリア「レーダーに感！ザフトです！」

ナタル「なに！？」

マリュー「このタイミングで！」ムウ「当然だらうな。データを持ち帰つては欲しくないだらうなザフトは……！」

ナタル「どうします？」

アークエンジエルは大気圏突入態勢だ。マリューが対応に困つていたところにメネラオスから通信がきた。

ハルバートン「ラミアス大尉！ザフトは我々に任せて君たちはシャトルをだして大気圏突入をしたまえ！」

マリュー「…ですがシャトルが危険です！」

とマリューが反論したとき、待機していたストライクから通信が入つた。

カガリ「なら私だけでもだしてくれ！」

ナタル「少尉？」

ナタルはカガリを先ほど軍に志願したためついた階級で呼んだ。

カガリ「ストライクならいざとなつたら単機で大気圏突入ができる

す」

マリュー「でも…」

ナタル「艦長、少尉の言つ通りだと思います。このままだとただの的です！」

マリュー「…わかりました！出撃してちょうだい

カガリ「…わかつたわ。出撃してちょうだい

サイ「カガリ、シャトルにはフレイが乗つている。…あいつのこと

をどう思つてているかはわからないけど守つてくれ…」

カガリ「…了解」

ミリアリア「ストライク発進どうぞ！」

カガリ「カガリ・ヤマト、ストライク行くぞ！」

アークエンジエルから出撃した力ガリだつたが重力に引き寄せられる感じに苛立つた。

力ガリ「くそ！機体の動きが重い！」  
と悪態をついた時だ。

ザフト側のXナンバーが来た。

力ガリ「ち…！やはり来たか！」

引き寄せられる感覚に慣れないながらも機体をむかわせた。

一方のザフトのXナンバーのパイロットの四人も重力に苛立つていた。その上地球の重力は初めてなので力ガリより動きが鈍い。

イザーク「くそ！」

ディアツカ「うつとうしいなこの感覚！」

ニコル「機体が重いですね…。アスラン、大丈夫ですか？」

アスラン「ああ、大丈夫…。心配無用だ」

ディアツカ「たく…。俺は艦をやる！」

ニコル「じゃあ僕は護衛機を叩きます」

アスラン「わかつた。イザークは…」

イザーク「俺はストライクをやる！」

と先にいつてしまつた。

アスラン「ちょ…！」

ディアツカ「あ…あ。あいつストライクに顔に傷をつけられてかな  
り頭にきているな。アスラン、イザークの子守頼んだよ  
とバスターもいつてしまつた。

ニコル「ディアツカ…！アスランすいません、ぼくからもお願ひします」

アスラン「わかつたよ…。気をつけろよ」

ニコル「はい！」

ブリッツは艦隊にイージスはストライクに向かつた。

イザーク「ストライク！」

デュエルはサーべルを抜いてストライクに切りかかった。

カガリ「ち！」

ストライクもサーべルを抜いてガードした。

今回のデュエルはアーマーがついていて武器も追加されていた。デュエルの火力不足を補つたのだろう。

デュエルは距離を取つて肩のシウ、アを撃つた。ストライクはそれを避けつつライフルを撃つた。

イザーク「くそー！」

デュエルはミサイルをばらまいた。

カガリ「その程度！」

ストライクは避けないでデュエルに突っ込んだ。ストライクはデュエルを蹴つて吹き飛ばしその隙にデュエルのライフルを撃つた。

イザーク「くそ！」

アスラン「イザーク！」

イザーク「アスラン！何しに来た！？」

アスラン「何しに…助けにだよ…」

アスランはイザークのハツ当たりに呆れながら答えた。

イザーク「貴様の助けなぞいらん！それをよこせ！」

とイージスのライフルを奪つた。

アスラン「イザーク！たく！」

イージスもサーべルを抜いてストライクに向かつた。

一方艦隊はザフトの攻撃で壊滅状態だった。メネラオスもどひろびころから煙が出ていた。

ハルバートン「くそ…！元々我々のものにやられるとはな…」

マリュー「閣下危険です、脱出を！」

メネラオスの状態を心配したのかマリューは通信をした。

ハルバートン「…もう無駄だ…私自身も少し…怪我をしてね…。ごぶ…！」

マリュー「閣下！」

マリューは泣きそうな顔で叫んだ。

ハルバートン「…すまないラミアス大尉。あとは頼んだ…」と通信を切つた。そしてメネラオスはザフトの艦、ガモフに特攻し爆発した。

マリュー「閣下…」

ナタル「…道が開きました。艦長…」

マリュー「…わかってるわ。ストライクは？」

ミリアリア「デュエルとイージスと交戦中です！」

マリュー「もう少しでタイムリミットよ。戻るよ」に伝えて

サイ「それが…大気圏突入の影響で通信が…」

マリュー「…本人の判断に任せることはないわね…」

ストライクはデュエルとイージスの2機に互角の戦いをしていった。

アスラン「おいおい…！2機相手にもつとは…！」

イザーク「アスラン！貴様はライフルをもつていなければ邪魔だ！」

アスラン「それはお前が奪つたからだろうが！」

とケンカしていた。

ストライクはサーべルでイージスに切りかかった。

アスラン「つてカガリ！俺を殺す気か！？」

カガリ「お前は敵だろうが！」

アスラン「カガリ…！？」

アスランは愕然とした。カガリのことだから「お前と戦いたくない

！」と泣き顔で（アスランの勝手な妄想）言つてくると思った。が、どうだ？殺る気まんまだった。

そう考へていてもストライクはサーべルでイージスに切りかかつた。

アスラン「カガリ！」

イージスはストライクを蹴つて距離を離した。

イザーク「よし…今なら…！」

デュエルはライフルでストライクを撃とうとした。

アスラン「イザークやめ…！ん？なにかこっちに…」

アスランは止めようとしたがレーダーになにか反応した。来たのは

アスラン「シャトルか…。つてイザーク撃つのをやめろ…！」

イザーク「落ちろ！」

止めるのが遅かった。デュエルはライフルを撃ち、当たったのは…シャトルの方だった。

カガリ「な…！」

アスラン「くそ…！なんてことを…イザーク戻るぞ…！」

イザーク「なに…？俺はまだ…」

アスラン「つべこべ言わずに戻れ…それともシャトルの件ばらされたいか…？」

イザーク「くそ…！」

イザークはしぶしぶ従つた。偶然とはいえ民間のシャトルを撃つた。これがなにを意味するのかわかつていた。

カガリ「フレイ…」

カガリはぼんやりしていた。嫌な奴とはいえ、知り合いだった。それが死んだ。ショックだった。ストライクは重力に引かれて落ちていった。

シャトルの墜墜はアークエンジェルからも確認できた。

サイ「フレイー…！」

ミリアリア「そんな…！」

ナタル「悲しむのは後にして…ストライクは？」

ミリアリア「…大気圏突入中です…。コースから外れています」

マリュー「どこに落ちるか計算できる？」

サイ「ちょっと待ってください…そんな…ここは…」

ナタル「どこだ？」

サイ「本艦予定降下地は…アフリカ北部！」

その答えに一同は青ざめた。

サイ「ザフトの勢力圏です！」

## 第10話（後書き）

シン「残念でしたね、一話しかでれなくて」  
ハルバートン「いいんだよ。私みたいなのがこの後書きにでれることが奇跡だよ」

フレイ「…」

シン「で、ですね…」

マリュー「それにしてもカガリさんのこと『さん』づけでいいのかしら?」

キラ「今のところ代案がありませんからね」

フレイ「…」

カガリ「さつきからなんだお前…」

フレイ「なんだとはなによ!こんなに早く退場するなんて私聞いてない!」

アスラン「どこの関西スリッパツツコミ娘?」

ラクス「でもこのままアークエンジェルに残つても…ねえ…?どうやってカガリさんのこと利用するのですか?」

フレイ「うー、どつちに転んでもいいことないじゃない!」この怒りをどこにぶつければ…!」

カガリ「シンにぶつければ?」

シン「なんで俺!?」

カガリ「はつきり言って今のところシンは内容に不満を持った人の相手だからな。ま、がんばれよ(笑)」

シン「アスハー!本編の恨みか!」

カガリ「…そんな気なかつたけど言わるとなんか私もボコボコにしようかな…(黒笑)」サガーケベルト装備

シン「ちょ…!作品違う!…なんで持つて…イタア!待て、ムチで叩くな…グフオ!やめろー!なんか目覚め…アーーー!」

キラ「うわあ…見てられないよ…。ってフレイいいの?」

フレイ「いいわよ。別の機会にするわ、かわいそудし」

シン「別の機会つてまたやるの…？」

カガリ「おり逃げるな」 必殺技発動

シン「ギャアアー！」

アスラン「ひどいもんだな…」

キラ「もう止めようよ」

アスラン「しばらくしたらな。次回は『』よ地上編だ」

キラ「やつと僕の出番か。どう絡んでくるかな？」

ラクス「それでは次回をお楽しみに！」

シン「え、ちょ…！」のまま終わり！？なんかアスハはダークキバになつてゐし！必殺技発動しようとしてるし…え、まじですいません！だからやめ…ア……！」

## 第1-1話（前書き）

すいません。また間があきましたm（――）m

カガリ「グゥウウ…！」

砂漠に落としたストライクの中でカガリは目覚めた。

カガリ（暑い…。息をするたびに肺が焦げそうだ…！）

カガリはヘルメットを取り、パイロットスーツの前を少し開けた。

カガリ「フレイ…」

カガリは先ほど散った人物を思い返した。最初は普通の女性だったのに戦争によつて変わってしまった。

カガリ「…ふん、まあそれが案外あいつの本性だらうな…」  
だが同情しなかつた。散々自分のことを悪く言つたのだ。当然だ、とカガリは思つた。そんなことよりも…

カガリ「アスラン…」

カガリは先ほどの戦闘でアスランに言い放つことが自分でも信じられなかつた。

カガリ「私は…何を言つて…。私はあいつのことを…」  
とカガリは涙を流した。あの時アスランと戦つて楽しいという感情だつた。楽しいわけがない。しかし…

カガリ「だけど…これが私だから…！」

この時からカガリは戦争という狂氣の波にのまれつつあつた。

アークエンジェルは地球連合軍第八艦隊という犠牲を払つて地球に降りたが、本来の目的から大きく離れ、アフリカ大陸北部、すなわちザフトの勢力圏の真っ只中にいた。

ミリアリア「大丈夫カガリ？」

彼女の前には高熱でうなされているカガリの姿があつた。

先ほど回収されたものの突然倒れたため医務室に運ばれた。

カガリ「もう…大丈夫だ…。心配するなつて…」

トール「でも、すごい熱だろ？」

カガリ「本当に大丈夫だつて…。私コーディネーターだし…」

ミリアリア「でも同じ人間でしょ？そんなこと言わないの」

カガリ「ありがとう…。そういうばサイは？」

トール「自分の部屋にいるよ…。やつぱりフレイのことショックだつたみたい」

カガリ「ごめん私のせいで…」

トール「そう自分を責めるなよ…」

ミリアリア「そうよ…。とりあえず寝てた方がいいよ」

カガリ「そう言わると気が楽になるよ…。おやすみ」

といつてカガリは目を閉じた。よほど疲れていたのかすぐに寝てしまった。

一方マリュー達は艦長室で今後について話合っていた。

ムウ「みごとに敵の勢力圏だ…。まいったねえ」

マリュー「仕方ありません。そのままストライクと離れる訳にはいかなかつたのですから」

と答えるが、彼女の表情には迷いがあった。

友軍にはザフトが設置したNジャマーのせいでの連絡は取れない、現戦力は第八艦隊から受け取つた2機のスカイグラスパー（操縦できるのがムウだけなので1機だけ）、そしてストライクのみである。もし自分が頭の切れる名将だったらなんとかできるが、いくそうではない。というよりそうだったとしてもなんとかできるのだろうか。

マリュー「ともかく、本艦は当初の目的通りアラスカに向かいます」

ムウ「…まあそんなに気張りなさんな。俺達も頑張るからよ」

マリュー「…期待します」

ムウ「了解…。じゃあなそろ寝なよ。夜更かしは体に毒だぜ？」  
といってムウは部屋から出て行つた。

マリュー「先が思いやられるわ…」

## 第11話（後書き）

キラ「やつとだよ…」

アスラン「1ヶ月近くあいたよな?」

カガリ「潰すか?」 ドッカハンマー装備

シン「?どこから持つてきたの!?てかやめて!」

カガリ「(チツ….)冗談だよ」

シン「うん、ツツコミたいけど怖いから無視で」

ラクス「というよりも後書きのカガリさん怖いですわ…」

カガリ「大丈夫だ。なるべくシン限定にするから」

シン以外「「「なら安心」」」

シン「俺安心じゃねえ————！」

カガリ「ガンダム関係ないけどクラヒーフォーゼおもしろかったな」

キラ「本当に関係ないね」

アスラン「今まで超必殺技がなかつたライダーの超必殺技もなかつこよかつたな」 ラクス「シリーズをかさねる」とに段々進化してます  
からね

キラ「特にカブト系がかっこよかつたかな、個人的に」

アスラン「昭和もかつこよかつたな、ナレーションについてて」

カガリ「私は…」

シン「『地獄兄弟かっこいい!』っていっそう

ラクス「なぜですか?」

シン「すぐやさぐれそつ」

カガリ「…」

『タカ・クジャク・コンドル・ギン・ギン・ギン・ギン! ギガスキ

ヤン!』

シン「 丸焼き

アスラン「あればシンが悪い」 (一番よかつたのはBLACK)

ラクス「ですわね」（カイザがよかつた）

キラ「元気出してよ。スマートボックじゃ大活躍でしょ」（NEW魔王がるよ）

カガリ「私だつてなあ…『ファンネル!』って叫びたいよ…。他作品のロボットと大戦（ロット誤字）したいよ…」（タジヤドルるよ）

シン「調子にのつて…すいません」（ダークカブトるよ）

## キャラ紹介1（前書き）

主人公2人の紹介です。

## キャラ紹介1

カガリ・ヤマト

主人公。

本作では彼女がアレである。

アスランとは相思相愛だったが、アスランの父親の事情で離ればなれになる。

再会した時は敵同士になってしまふ。

幼少期の頃はアスランにからかわれるほど熱い性格だったが、再会までの間なにかあつたらしいが…

アスラン・ザラ

主人公2。

ザフト所属の兵士でパトリック・ザラの息子。

カガリとは相思相愛だったが、父親の事情で離ればなれになる。

再会した時に敵同士なつてしまい、苦悩する。

母レノアを失つてナチュラルを憎悪する父親に嫌悪感をいだいている。

ラクスとは許婚の間柄だがカガリのことを話し、ラクスも承知している。

## キャラ紹介1（後書き）

シン「今頃キャラ紹介かよ…」

キラ「はつきり言って場つなぎだけどね」

シン「オイイイーーー！？」

カガリ「エクストリームバーサスでアルケーガンダムとブルーデスティニーーーー号機が配信されているのかー」

ラクス「アルケーはともかくブルーデスティニーーは意外でしたわ」

ルナ「これから外伝作品からの参戦が楽しみね」

カガリ「？つていきなり出てくるな！？」

ルナ「作者から許可はしましたよ。作者曰わく『もしDestiny編やつても影薄いからでてOK…だそうです…』」

カガリ「…まあ私が主人公だと思うからな。必然的に薄くなるかな」

ルナ「うう…。ううなつたらアスランと結ば」

カガリ「お~いキラ」。ブルーテスティニーーにこのアホ毛女乗せてEXAMのテストしろ」

キラ「適合しないと名もなき連邦兵みたいになるけどいいの？」

カガリ「むしろそれを望んでる！」

ルナ「ひどー？」

シン「あきらめろルナ…。ううじゃああいつが主導権にぎってるから…（泣）」

カガリ「そういうえばアルケーはイノベイダーの技術を使っているって設定だけど…どこがイノベイダーの技術なんだ？」

キラ「強化した所つていえば、

- ・ファングの本数が増えた。

- ・バスター・ソードの強化。

・サーベルの本数

くらいかな?」

カガリ「うーんなんかイノベイダーじゃなくてもできるんじゃない  
か?」

キラ「サーベルなんてシロッコに頼めばもつと強化できると思つよ  
(木星的な意味で)

カガリ「…はつきり言つてトランザム発動されたらサーチェス終了  
のお知らせじやん。ほぼ全敗じやん」(スペシャルエディションで  
トランザム発動時のデュナメスに攻撃当たつたくらい)

キラ「…なんかサーチェスがかわいそうになつてきた…。トランザ  
ムシステム積んでくれればよかつたのに…」

多分、

・ビリーはあくまでもイノベイダーに協力しているのでサーチェス  
の分は用意しなかつた  
・リボンズが人間を信用していないので積まなかつた  
かな?

サーチェス「イノベイダー殴つていいか?」

刹那「それはさせん!特にリボンズは(中の人的に)…」

第1-2話（前書き）

相変わらず戦闘描写下手だなあ（Ｔ－Ｔ）

太陽が沈み、外は暗くなっていた。

カガリは熱が下がったので自室に戻っていた。

敵の接近を知らせる警報が鳴り響いた。

カガリは自室を飛び出し、パイロットスーツを着てストライクに待機した。

カガリ「艦長、敵は！？」

マリュー「ちょっとと待つてちょうどだい！今索敵中よ！」

カガリ「早くしてくれ…！」

カガリは飛び出したい気持ちを抑えてつぶやいた。

宇宙なら基本的に人型のMSなのでだいたいエールにすればいいが、地上では人型以外にあると聞いたことがある。

パックは慎重に選ばないといけない。

ミリアリア「データ出ました！敵はバクウです」

ナタル「バクウだと！？」

バクウとは四足歩行型のMSで犬みたいな外見をしている。砂漠ではバクウの方が有利だ。

カガリ「ならソードで行く！」

カガリはソードパックをストライクに装着して発進した。

しかし砂漠に足を取られる。おまけにカガリは重力下の戦闘が始めてだ。

が、敵はそれを構いなしにミサイルで攻撃してくる。

カガリ「ぐ…！」

ストライクはシユベルトゲーベルを振るうが相手は素早く、なかなか動きが捉えられない。

カガリ「だつたら！」

ストライクはパンツアーアイゼンをバクウに向かって射出した。パ

ンツァー・アイゼンは見事バクウを捕らえ、ストライクはパンツァー・アイゼンを引つ張った。

こちらにとんできたバクウをシユベルトゲーベルで切り、バクウを撃墜した。

が、まだまだ敵はいた。実弾の攻撃をくらいP.S装甲のエネルギーも減る。

カガリ「この…やうひー…」

先ほどと同じようにもう一機バクウを撃墜するがエネルギーは底を尽きそうだった。

カガリ「どうしたら…！？」

と考えた時だつた。

ストライクの目の前をバギーが走ってきた。バギーからストライクに向かつてワイヤーが発射された。

? ? ? 「MSパイロット！き、聞こえますか！？」

通信機に若い少年のような声が聞こえた。どうもワイヤーをアンテナに経由しているらしい。

一拍遅れてモニターに付近の地図らしい图形が出てきた。地図の一  
点が点滅した。

? ? ? 「そ、そのポイントにバクウをおびき寄せてください！お願  
いします！」

とこちらの返事を待たずして通信を切ってしまった。

誰かわからないがザフトの敵であることは間違いない。

誰かわからない奴に助けてもらつのはしゃくだが、状況を開するには従うしかなかつた。

カガリが考えている間にもバクウが3機迫つている。

…覚悟を決めるか…。

カガリは腹を決め、ストライクをポイントへ向かわせた。その間に  
もエネルギーゲージがレッドゾーンギリギリだ。

カガリ「あそこか…？」

ストライクをジャンプさせ、地図のポイントの近くに降り立つた。

バクウが近づいてきた。

カガリ「今だ！」

カガリはバクウが近くまで来たところをストライクをジャンプさせた。

さつきまでいたところをバクウが着地すると爆音とともに地面が陥没した。バクウは穴の中に落ちると、廃坑の天然ガスに引火し、バクウは吹き飛んだ。

カガリはバクウの破片を無表情で見つめた。

アークエンジェルの艦橋では、無事だったストライクの姿を見て安堵した。

その時、偵察に行つたムウから通信が入つた。

ムウ「そつちは大丈夫か！？」

マリュー「ええ、こちらは無事です」

ムウ「俺たちはとんでもない奴を相手にしているぜ！」

ムウは言葉をつないだ。

ムウ「敵旗艦はレセップス… アンドリュー・バルドフェルドの旗艦だ！」

その名を聞いてマリュー達は凍りついた。

アンドリュー・バルドフェルド…「砂漠の虎」の牙がアークエンジエルに襲いかかるうとしていた。

## 第12話（後書き）

カガリ「地上で初戦闘だ」

アスラン「バクウの破片を見て何を思ったのだろう？」

キラ「僕と一緒にしよ？」

ラクス「さあ？まだわかりませんよ」

カガリ「今度のエクストリームバーサスの配信機体は」「トランジ

ジ・カ

アスラン「まあカティナはなんで前回（GVSG NEXT）でゲ  
ドラフで出てきたのかわからないが」

キラ「シロッコも最初からジ・でくればよかつたのに。おかげで  
Ζガンダムのオープニングムービーがおかしなことに…」

カガリ「これからどんな機体が出てくるか楽しみだな」

シン「まあ基本的に今まで出てきた機体とかぶらないようにするな

ルナ「あと真新しいものね」

アスラン「水陸両用機はないんじゃないかな？」

シン「アッガイは？」

アスラン「あれは見た目だな」

カガリ「なら他の機体は出ないな。Ζゴックとか」

キラ「じゃあアビスは出れないね」

アウル「チキショー！！！」「Ζ」

ラクス「X枠からもうそろそろ出てもいいじゃないですか？2機だけですしき」

アスラン「ならエアマスターだな。レオパルドはヘビーアームズとかぶる」

シン「それより大事なのがいるじゃないですか」

カガリ「なんだ？」

シン「ガンダムAGE」  
「「「確かにそうだ！」」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2468x/>

---

機動戦士ガンダムSEED ANOTHER WORLD

2011年12月25日19時50分発行